

- und die Menschheit, III, Die Erneuerung des Judentums. Rütten & Löning, 1911, 102 S.
- (13) ゲルゾンが聞かされた講演は『Volkserziehung als unsere Aufgabe』(『ユダヤ』)の点字
 ひょうごは註(2)の五四一頁以下参照。
- (14) これについては註(4)の年鑑一九五九年度のエリヤフ・マオンの論文 p.165
 ~82 及び一六六頁と一六七頁の間に挿入のキプツ・ハンブレアの写真参照。
- (15) Vgl. Martin Buber Briefwechsel, Bd. III, S. 587.
- (16) Vgl. Grete Schaeder, a. a. O., 103.
- (17) Vgl. Martin Buber Briefwechsel, Bd. III, S. 587, Anm. 1.
- (18) Vgl. Grete Schaeder, a. a. O., S. 140 f. u. Derselbe, Martin Buber : A Biographical
 Sketch, p. 61 ff.; in The Letters of Martin Buber, Life of Dialogue.
- (19) 前記私の著書五三八~五九九頁参照。
- (20) Vgl. Gerete Saeder, a. a. O., s. 102 unten f. u. (E), a. a. O., p. 42., Elyahu Maoz,
 The Werkleute : in Year Book IV (1959), p. 165.
- (21) Vgl. Menachem Gerson, a. a. O., p. 131.
- (22) Martin Buber Briefwechsel Bd. II, S. 331.
- (23) Derselbe, a. a. O., S. 331 f..
- (24) Derselbe, a. a. O., S. 365.
- (25) Vgl. Maurice Friedman, a. a. O., p. 151.
- (26) Martin Buber Briefwechsel Bd. III, S. 23.
- (27) Haim Gordon, a. a. O., p. 104.
- (28) Derselbe, a. a. O., p. 99.
- (29) Derselbe, a. a. O., p. 102.
- (30) Derselbe, a. a. O., p. 98.
- (31) Martin Buber, Der Jude und Sein Judentum, Melzer, 1963, S. 475.
- (32) Vgl. Maurice Friedman, a. a. O., p. 153.
- He was a master of conversation—and each conversation with him reached its high
 point when his partner in conversation shared with him the central problems which beset
 him in the intellectual, political, or personal sphere. When I got to know him in 1927, he
 had already made it a rule to answer personally every letter that he received: and when he
 accepted a young person as his personal disciple, then he shared in all that person's joys
 and sorrows. This great capacity to listen, to conduct a dialogue with individuals and
 with historical happenings—this rare capacity is that which determined Buber's person
 and made every conversation with him into a life-experience in which clarification, deep-
 ening, and encouragement wonderfully united.
- (33) Martin Buber Briefwechsel, Bd. III, S. 632 u. The Letters of Martin Buber p. 668.
- (34) Derselbe, Der Jude und Sein Judentum, S. 778.
- (35) Derselbe, a. a. O., S. 790.
- (36) Derselbe, Begegnung, Autobiographische Fragmente. W. Kohlhammer, 1960, S. 26 f..
- (37) Derselbe, Der Jude und Sein Judentum, ebenda.
- (38) Vgl. Derselbe, a. a. O., S. 793.
- (39) 「ブリン・シャロート」(1951年)
 Paul R. Mendes-Flohr (ed.), A Land of Two Peoples, Martin Buber on Jews and Arabs,
 Oxford U. P., 1983, p. 72~75 (『ユダヤ』本誌や L. t. P. 参照).
 Derselbe (Hrsg.), Martin Buber, Ein Land und zwei Völker, zur jüdisch-arabis en Frage,
 Insel, 1983, S. 102~105. (『ユダヤ』本誌や L. z. V. 参照).
 私の著書五五五~五九九頁参照。
 「マオズ」(1951年)
 Vgl. L. t. P. p. 148~49, L. z. V. S. 199~201.
 私の著書一三三~一五九頁参照
- (40) L. t. P., 152. u. L. z. V., S. 203.
- (41) Vgl. L. t. P., p. 153 f. u. L. z. V., S. 206 f..
- (42) Vgl. L. t. P., p. 164~68 u. L. z. V., S. 219~25.
- (43) Vgl. L. t. P., p. 297 f. u. L. z. V., S. 373.
- (44) Vgl. L. t. P., p. 294~95 u. L. z. V., S. 370~72.
- (45) L. t. P., p. 296 f. u. L. z. V., S. 372 f..
- (46) 註(4) 参照。
- (47) Haim Gordon, a. a. O., p. 105 f..

は彼らに答える際に預言者のポーズをとったのだった。ブーバーは君が君の人生で何が意味があるのかを求めていると分った時だけ、ポーズをとる役者がかったことをやめた⁴⁷⁾。

と言っているが、ここにその人をよく見、その批評的側面を認めたと上で、その師を尊敬するゲルゾンの人柄が伺えるであろう。ともあれ両者の理想と現実の様相は異なるが、それぞれに自己のコースにおいて誠実に生き抜いたのである。二人の関係そしてユダヤの青少年の運動またイスラエル対アラブの問題は、それ故に、現代の教育現象の中でも再検討する必要があるように思われる。師弟の関係、教育の時代の流れの中で。

註

- (1) Nahum N. Glatzer and Paul Mendes-Flohr (tr. a. ed.), *The Letters of Martin Buber*. Schocken Books, 1991 の六七五頁におけるゲルゾンの略歴紹介には生没年が1908-84と記されてゐるが没年は間違ひなので、本文のように八九年と訂正しておく。私はキプツ・ハツレマで会見後ゲルゾンと文通し、Seasons Greetingも交換している。八〇年には彼の著書『Family, Women, and Socialization in the Kibbutz. Lexington Books, 1978』を彼の依頼により『教育哲学研究』第四一号(一九八〇)に書評を書いている。その後も文通は続いたが、八十六七年以降本文はハバ夫人の代筆で署名のみ彼であった。そのふるえるような筆跡は病気を予想させたが、八九年にハバ夫人より春にアルツハイマー病をここ数年患った後死去したという報告を受けている。享年八十一歳。
- (2) 私の著書『ブーバー教育思想の研究』風間書房一九九三、五三三-三四頁参照。
- (3) Martin Buber, *Briefwechsel aus sieben Jahrzehnten*. Lambert Schneider, 1972, Bd. I : 1897-1918; 1973, Bd. II : 1918-1938; 1975, Bd. III 1938-1965.
- (4) *Publications of the Leo Baeck Institute of Jews from Germany, Year Book*.
- (5) Haim Gordon, *The Other Martin Buber, Recollection of His Contemporaries*. Ohio U.P. 1988.
- (6) Maurice Friedman, *Martin Buber's Life and Work, The Middle Years 1923-1945*. Dutton, 1983, p. 142-154 (Chap. 8, Hermann Gerson and the "Work Folk").
Grete Schaefer, *Martin Buber, Ein biographischer Abriss*, in *Martin Buber Briefwechsel* Bd. I, S. 19-141.
- (7) これについては次の私の報告参照。
ブーバー生誕一〇〇年記念学会『聖書と教会』117、一九八八、六
The Thought of Mart in Buber, A Centenary Conference : 1878-1978. 『教育哲学研究』38、一九八九、一
- (8) Vgl. *Martin Buber Briefwechsel*, Bd. III, S. 631 f.
- (9) 独文ではヘブル語の写音、英文ではその訳が示されている。
- (10) Vgl. *Martin Buber Briefwechsel*, Bd. III, S. 631.
- (11) Vgl. *Martin Buber Briefwechsel*, Bd. II S. 278-80.
- (12) *Drei Reden über das Judentum*. I : Das Judentum und die Juden., II, Das Judentum

以下ブーバーとゲルゾンに関係ある論文を抽出しておく。

Year Book III (1958)

Ernst Simon, *Martin Buber and German Jewry*.

Year Book IV (1959)

Walter Gross, *The Zionist Students' Movement*.

Eliyahu Maoz (Moshacher), *The Werkleute*.

Year Book XIX (1974)

Chanoch Rinnott, *Major Trends in Jewish Youth Movement in Germany*.

Werner Rosenstock, *The Jewish Youth Movement*.

Year Book XXIII (1978)

Chaim Schatzker, *Martin Buber's Influence on the Jewish Youth Movement in Germany*.

Year Book XXV (1980)

Arthur A. Cohen, *Martin Buber and Judaism*. Nahum N. Glatzer, *Reflections on Buber's Impact on German Jewry*.

(49)

考えである。そこにシャザールによるエルサレム名誉市民への推挙も遅すぎたという批難もあるわけである。ドイツで描いた理想、パレスチナで直面した現実がゲルゾンにとっては非情なものであった。ブーバーにとっては落差であった。

四 おわりに

ドイツに一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて生じたワンダーフォーゲルは、その後ヒトラー・ユーゲントに収斂していった運命はどうあれ、教育文化史的に大きな意味を持つ。特にヴィネケンの〈青年文化 (Jugendkultur)〉の主張やゲルリットの国民主義的共同性の志向は、広範な〈青年運動 (Jugendbewegung)〉として教育学的には〈教育改革運動 (Reformpädagogischebewegung)〉への道を拓いている。国を知ることににより国民意識の涵養となるが、ドイツ系ユダヤ人青年運動もこれに刺戟され、民族的に多様な展開をしたのである。ゲルゾンのクライス、ヴェルクロイテのリーダーとしての参加も、これらドイツの動きを背景とするが、ブーバーとの出会いが決定的方向づけとなったわけである。

ブーバーとゲルゾンについてはフリードマンやシェーダーの他、レオ・ベック協会年鑑におけるエルンスト・ジーマン、W・グロス、E・マオツ、Ch・リノット、ハイム・シャツカー、アーサー・A・コーエン、ナフム・N・グラツツァー等の研究がある⁴⁶。その中にはわが国では殆んど入手不可能な青年時代のゲルゾンの文章の断片を読むことができる。当初年鑑におけるこれらの文章を再構成して、私自身著書では言及しなかった部分を明らかにし、フリードマンの研究を補完するとともに、新たな部面を開示しようかと考えていた。しかしそれでは結局先行研究の

枠内での資料操作から一步も出ないことになり、新見の提出はない。そこでゲルゾンとの会見の日、恐らく私が最初に見たであろうペン・グリオン大学での学会出席拒否の声明文と、往復書簡集第三巻末尾の二通のブーバー宛書簡を中心に語った彼のブーバー観を軸として二人の関係をみることにしたのである。その際著書では註にまわしたので、恐らく精読されないであろう、ブーバーとペン・グリオンの関係を本文におこして、三の後半にあてた。著書一四〇一ページ以下の注(164)の文章がそれであり、若干加除訂正を加えた。新見が出ていれば幸いである。なおゲルゾンにとって、一時的断絶はあっても、ブーバーは彼の〈偉大な先生〉であり、その敬愛の念は私との対話の際もひしひしと感じられたものであった。厳粛であったが、ハイム・ゴードンに一人の人格としてブーバーを批判する際、主なものは何か、と問われた際、

ある重要な領域で彼は果敢に物を言う勇氣を持っていなかったように思われる。ここに——ヒトラーが権力を掌握し、ドイツでの彼の生命そのものが脅やかされた後に、しかもヘブル大学の教授就任がやっと決つた後にはあるが——六十歳になるまでイスラエルにやって来なかった人であったことがあるが、その彼がシオニズムのために働らき、シオニズムについて書き、しかもシオニズムを教えたのだ。同じことは彼の空想的社会主義との関係についても言えることだ。彼は空想的社会主義について書きはしたが、決してその中で生きようとはしなかった人なのだ。二つ目の批判は、彼がしばしば預言者のポーズをとったことである。かつて一度彼がキブツの教師養成機関であるオラニムに来たことがあった。訪問前に彼と会い、学生たちがブーバーに彼らに真に関係することを質問すると念を押しておいた、そうでないと彼は預言者のポーズをとろうとするからだ。こういうことは五十歳終り頃から六十歳はじめの頃であった。そう、学生たちは一般的なことを質問した、すると案の定、ブーバー

統計学的かつ人道的視点において、難民の居住地選択が安全かつ自由に行われるようにすることを提言する。そのために、イスラエルが互恵の立場で難民問題に理解を示して解決へ参加すること、中東の真の平和を確立するために、世界の全国家にこの問題を解決するための援助を要請すること、という二つのことを要望する。しかしこれがイスラエルの現実の政治に反映することはなかった。少数派の意見の一つでしかなかったのである。それでもなおこの公開書簡には「ブーバーの〈両民族国家〉に基づく、真のシャロームの精神を見ることができようである」⁽⁴⁶⁾。

そして更に一九六二年一月フランス滞在中のベン・グリオンは『フィガロ (Le Figaro)』紙のインタビューに答えて「イスラエルに居住するアラブ人は、如何なるアラブ国家における同胞たちより遙かにまさった経済的、社会的、教育的状態を享受している。それなのに彼らは依然として不平を言い、イスラエルに敵対している」と言い、その原因は過激なイスラーム原理によるアラブ民族主義にこり固まっているからだとする、そして彼らがイスラエルの高度の文化を個人的に享受しながら、この国家がアラブの国となることを願い、機会があればイスラエルを滅ぼそうとしている、とイスラエル在住アラブ人を非難した。これに対してブーバーは二人の同志とともに、「イフド」の名でただちにこれに抗議した。即ち右のカッコで示したベン・グリオンの言葉を提示した上で、

見ての通り、ベン・グリオン氏は、我々がシオニズム運動の歴史とイデオロギーから学んできたもの、即ちより高度の経済的、社会的、教育的状態のために——個人的かつ国民的に——平等と尊厳の生活を軽視すべきでないことを忘れてしまっている。イスラエル国家が設立された時、アラブ人住民は、差別のない、完全な平等を約束された。しかしながら

この十三年間に、イスラエルの政府は、アラブの市民的、政治的状況の改善のため多くの機会を無視してきたし、国内のアラブ住民の中に自分が二流の市民であるという感覚を生じさせる所業を犯してきたのである。従って「イフド」は政府に対して、国内在住のアラブ人に対する責務を充足する権限内にある一切の事を履行することと、とりわけ軍政権によることではあるが、この責務に反対する全ての差別的実現を撤回することを要求する⁽⁴⁷⁾。

と宣言した。アラブ人を排除してパレスチナにユダヤ人の統一国家をつくることは、政治的シオニズムの絶対的理念であった。ヘルツルが求めたのは正に「ユダヤ人の国家」であった。そこにはパレスチナのアラブが見えていない。これを純粹に実現するならば、アラブの問題は回避できない。政治的シオニズムもその選択の一つである。これを理念とした時、ベン・グリオンらの右のような主張は必然である。その底にあるものは、国家建設の過程で体験してきたアラブ・ナショナリズムであり、アラブ人への不信と猜疑心である。それ故に全ての面でこれをポイコットしようとするラディカルな構えである。これに抗議するブーバーの基本理念は「両民族国家」論であり、青年時代において、ドイツ系ユダヤ人青少年指導者であった時代そしてイスラエル移住後において不変であった。ドイツにおいてはその美しい理想の故に彼はカリスマ的指導者であったが、イスラエルにあつては、現実無視の不毛な理論家として無視されることの多い少数派に甘んじなければならなかったのである。

ゲルズンは、パレスチナの過酷な現実の中で一時離反することはあつたが、このブーバーを「偉大な師」として知る。イスラエル移住後世界的評価とは裏腹に、その三十数年イスラエル政府のブーバーへの対応は、その政治的見解を異にするとはいへ、不当であるというのがゲルズンの

レスチナ・アラブ人を全く考慮しないで事を運ぶ政治的シオニズムに対する不信を表明した。¹¹ しかもこれは同じく四四年五月の「大多数か多数か、談話への付記 (Rov o Rabbim? Beshulei neum echad)」におけるベン・グリオン批判を前提したものであった。即ち「イフド」はアラブとの共存をコーズとしつつ、大戦下でヨーロッパ在住のユダヤ人の生活が困難になつていくのを配視しながら、できる限り多くの (Rabbim) ユダヤ人がパレスチナへ入植するよう要望した。これに対してベン・グリオンはパレスチナの労働者総同盟¹²の会合で、ユダヤ人の入植が多くの¹³では意味がない、「イフド」はなぜ絶対多数 (Toib) と言わないのか、とその主張するアラブとの合意によるユダヤ人入植の構えを非難嘲嗤した。ヘルツルの直系である彼の基本的意図は、ユダヤ人が「絶対多数」でパレスチナをエレット・イスラエルとするかの「ユダヤ人国家」を建設することにより、先住のアラブ人を少数者として従なることにすることであり、自明の前提である。アラブの近代民族主義が成立する背景には、ヨーロッパ列強により石油資源獲得を目的とした帝国主義的植民政策とともに、近代シオニズムによるユダヤ人のパレスチナへの流入と土地取得及びそれによる人口比率の逆転に対する危機感があつたことは否定できない。政治的シオニズムはこれを承知の上で、ユダヤ人のためのみのエレット・イスラエルによる国家建設を意図するのである。当初よりこの立場をとらないブーバーは、政治的シオニズムの立場から「イフド」を批判するベン・グリオンに反駁するのである。彼は「ラビーム」がヨーロッパ・ユダヤ人の救済を主とした道義的視点があるのに対して、「ヘロブ」にはユダヤ人を優先とする政治的意図があるのでこれを否定する。アラブ人の不信と敵意を助長し、反ユダヤ的民族主義を増幅することは否定できないからである。ヨーロッパの状況のみならず、シオニズムの傾向から今

後ユダヤ人がパレスチナにおいて「ラビーム」となつていくであろうが、それだからこそ「両民族国家」の建設が、同じ大地に生きる両民族の道義的、政治的充足を果すであろうという確信がそこにはある。そしてこれが平和裡に実現するなら、両者の利害関係を明確にしつつ発展させる広範囲にして密接な経済的協力関係が成立し、結果的には汎シリア連合への参加の道を拓き、パレスチナにおける両民族の望ましい発展が可能となるであろう。そのためにこそ今必要なのが両民族の信頼と理解への意志である。¹²

ここにブーバーとベン・グリオンとの政治的・思想的差異は明らかである。ブーバーは終生アラブとの真の同権を主張した。¹⁴ 特に大統領となつたベン・グリオンへの要望と批判は一貫している。その第一は一九六一年十月十一日ベン・グリオンが議会 (Knesset) で、アラブ難民問題に関して彼らの居住地は彼らによる自由な選択に任せるべきだという提案を、その事自体イスラエルの滅亡を画策する陰険極まりないものであると判定し、イスラエル政府として断乎拒絶すると却下した。そして彼らが同胞の地に再定住することが最も実際的で公正な解決策であると宣言した。これは一九五六年の所謂シナイ作戦後のイスラエルの対アラブの一貫した政治姿勢を示すものであり、難民ポイコットの政策の表明である。これに対してブーバーは十一月十五日「イフド」の名においてこれに抗議するベン・グリオン宛公開書簡を発表した。その書簡で彼は、アラブ難民へのイスラエルの還帰と補償もないまま、居住地選択自由の提案を陰険なものとして拒絶したことを「イフド」へは遺憾とする旨表明し、これが国連決議に反し、世界人権宣言の精神にも反するものと非難するのである。そして難民問題の解決が平和裡に行われことを祈念し、アラブ諸国、難民、国際連合と協力して専門委員会を設置し、経済的、

する方向をとる。従って、ナショナル・ホームとしてのエレッツ・イスラエルの建設を目的とするシオニズム運動においても、単にユダヤ民族の国民的・文化的再生を図ることであり、その基底にはキリスト教社会で喪われた宗教的再生への期待があるのである。ブーバー自身青年時代にシオニズム運動に参加したことをユダヤ教信仰に至るワンステップだと言っているが、それは主関心がハシデイズム研究に向ったことによる。それは結局マックス・ノルドウ (Max Nordau, 1849-1923) に始まり、ヘルツルで大きく動いた一民族による直接的な政治的・経済的な国家建設の運動への反対表明となる。政治的次元でのみ近代ユダヤ民族運動が解決しないという確信によるのであり、その精神主義的シオニズムの立場からのヘルツルらへの批判は、同時にベン・グリオンらのシオニズムとも対立するのである。

〔三〕 つまりブーバーのベン・グリオンらの政治的シオニズムに対する批判は、ヘルツル批判の延長上にあるのである。ブーバーは、先にもふれたように、近代シオニズムを推進した功績は認め、その面を評価するのはやぶさかではない。しかし彼に基本的にユダヤ的なものを欠いたことについては厳しく批判した。即ちそれではパレスチナをエレッツ・イスラエルとする理念に肝心要めものを欠如することになるからである。ブーバーの眼から見れば、ヘルツルは、結局ユダヤ教信仰の基本的要件を欠いた、民族運動の過渡期にあつて、その生命的根柢への自覚のない偉大な詩人にすぎなかったのである。それだからこそ彼には単一の「ユダヤ人国家」はあつても、そこに居住しているアラブ人への配慮は全く欠落していたのである。ブーバーの立場はエレッツ・イスラエルとしてのパレスチナはユダヤ民族の家郷であると同時に、ユダヤ人の精神的統合の中心である故に、アラブとの共存を保証する両民族による国家

を建設することを理念とするものであつた。「ブリト・シャローム」や「イフド」へ積極的に参加したのも、その実現への期待であつた。これに對してヘルツル直系のベン・グリオンもまたアラブへの配慮はない。一九三九年の『マクドナルド白書』に反対する彼は、

もしもパレスチナへのユダヤ人の入植がアラブ人の合意如何にかかっているとすれば『白書』が曖昧にほめかしているように、ユダヤ人の入植は殆ど不可能であろう。この決定的な問題に対する我々の立場が明確にされなければならないのは、政治的にも徳義上も絶対に重要であるということである。ユダヤ人のパレスチナへの入植は、アラブ人と、の合意など必要がない。我々は当然の権利としてパレスチナへ還歸するのである。(Jewish immigration to Palestine need no consent. We are returning as of right.)

と聲明して憚らないが、ここに政治的シオニズムの入植の基本的性格が端的に示されると言つてよいであろう。アラブとの合意を否定する国家建設はいうまでもなくブーバーのとらえないところである。彼は「イフド」の「ユダヤとアラブ両民族の連合」や「両民族に対する平等な政治的権利」を保証し実現するという精神において、パレスチナの地にエレッツ・イスラエルを建設しようとする入植のユダヤ人の要望を充足する唯一の方法を、アラブの猜疑心と不安をやわらげ、両民族の合意で国家を建設することにある、と主張するのである、そして一九四四年六月に「信するな (Do Not Believe It! Glaube Es Nicht!)」を発表し、ヴァイツマンが第二次世界大戦下ヒトラー政権によるヨーロッパユダヤ人の移民受入れの問題について、ユダヤ人の生きるか死ぬかの問題だけを考えればいいことであつて、こんな簡単なことはない、と言つたことに仮托して、パ

人間問題がユダヤ民族の問題 (Judentumsfrage) とはならなかったものであり、彼にとってこの問題は人種としてのユダヤ人であることの問題 (Judenheisfrage) にすぎなかったのである。³⁴⁾

ここにブーバーのヘルツル批判の基本にあるものが記されている。ブーバーはシオニズムをユダヤ教を信ずる民族 (Judentum) の「事」と考えているのである。これに対してヘルツルは歴史の中で維持してきたユダヤ民族の伝統や信仰よりも、彼が直接新聞記者として体験したドレフュス事件を発想の起点とする。即ち種族乃至人種としてユダヤ人問題が先行しているのである。同じくシオンを志向すると言っても両者の相違はここにある。かくてブーバーはヘルツルを次のように言う。

ヘルツルはユダヤ人の伝統を持たない、幼年期にユダヤ人の印象がなく、ユダヤ人としての教育を受けていない。青年時代にユダヤ人についての知識を全く欠いた西ヨーロッパの同化ユダヤ人であった。彼は非ユダヤ的環境で成長したのであり、ユダヤ人の集団との接触はなかった。彼にはどんな出自の人間もユダヤ人のプロレタリアートのように疎遠であった。彼は消極的ながらユダヤ人の伝統には忠実であったが、それは彼がユダヤ人であるからではなく、彼の性格によるものであった。その彼が積極的にユダヤ人の伝統に首をつっこんだのは、ユダヤ人であるからでなく、一致して雄々しいところからである。彼は全き人間であった。彼は全きユダヤ人ではなかった。私が持っている彼の人間像は、彼の美しい偉大さと卓越性の中で、彼の高貴な献身と実行力の中で、不屈な忠実さの中で、シオニズム会議が行われたこの七年間における彼の人間的誤謬も大きかったが、それでもなお感銘深いものがあつた。と言つて私にはユダヤ人としての彼が中途半端で不完全であるように思われる。彼をユダヤ人の人格として称賛するのは根本的に間違っている。テ

オドル・ヘルツルの中には基本的にユダヤ的なものは何も生きていないのである。彼は民族の存在の啓示ではなかった。ユダヤ民族のたましいは流滴の中で、民族の奥底に告げられた僅かばかりの言葉を持つているだけである。ヘルツルはこの言葉に耳を傾けないのである。³⁵⁾

少し長い引用になつたが、ここにブーバーのヘルツル批判の骨格がある。彼はヘルツルの中に「事実」に対する態度と「人格」が密接に結びついており、指導者としてあることの「カリスマ」的態度も承知している。³⁶⁾ ヘルツルがユダヤ教そのものについて理解を欠いていたとして、ブーバーは彼のシオニズム思想に対しても「最も重要なのは彼がユダヤ運動を全体として把握していないということであつた。彼はシオニスト党が大きな機構の一部分として組織されたものにすぎないこと、シオニストの行動が大きな進化の整然とした一部分であることを理解していなかった。彼はシオニズムを結局つくられたものとみなしていたのであつて、生成し、全てつくつたものには執行あるのみだとみていたのではない。働いている人間の手で表現される際に推進される筈の内面的発展とみていたのではない」と批判するのである。彼は自らのシオニズムをもつて、新しいユダヤ人の世界を創るのだという確信の下に、全力をかけて目的とすることに当つたのであるが、ブーバーにとっては、ユダヤ民族の「内なるもの」を顧慮しないものは、運動の原理を欠くものとして否定されなければならないものである。端的に言えば政治的シオニズムはとれないのである。

青年時代シオニズム運動に参加して以来、ブーバーはアハド・ハアム (Ahad Haam od. Ascher Ginzberg, 1856-1927) らの文化的シオニズムに近い立場で、実存的に人間精神の内面的解放と浄化から民族の問題を志向

拒否する、これとは別に一月十日に同志とともにハイファ大学で記念学会を開く、と彼は言った。そしてさつき打ったばかりだという声明文を見せてくれた。後にペンシグリアン大学の学会でも成立前ゴタゴタがあり、分裂学会であることをユダヤ人研究者から聞いたが、ゲルゾンから直接出席拒否の声明文を見せられた時は、何か歴史的瞬間に居合わせたような厳粛なものを感じたのも事実である。この三つの話は筆者との間に交された私的なものであるが、ゲルゾンの対イスラエル政府とのブーバーの関係も示されているので、この点から検討する。

〔一〕 エルサレム名誉市民の推薦が遅きに失したというゲルゾンの思い入れは、明らかに関係者の背後への批難であつて、シャザール個人に対するものではない。彼の閲歴をみるならば、ミンスクのペロルーシアに生れ、ドイツに学び、労働者シオニスト運動、開拓者 (Helutz) 設立者の一人であり、エレッツ・イスラエルにあつてはヘブル人労働者総同盟 (Hisadut) の有力な成員であつたのが分る、ハポエル・ハツアイルの系列とは異なるが、と言つてペンシグリアンの立場直属というわけではない。従つてゲルゾンの批判は明確に政治的シオニズムに立つイスラエル政府そのものに対するものと解するのが妥当である。即ちブーバーがその創始者ヘルツルをどうみたか、ペンシグリアンとの関係はどうであつたかをみることにより、自ずとゲルゾンの言葉の背後にあるものが理解されるであらう。

一八九七年バーゼルでの第一回シオニスト会議はヘルツル無しには考えられないし、彼の著書『ユダヤ人国家』無しには、ペンシグリアンを第一代首相としたイスラエル建国も語られないであらう。若い日のブーバーもまたシオニストの一人としてその会議に出席し、パレスチナの一角をエレッツ・イスラエルとすることの認識を持ったのであるが、そ

の移住の方式、内容については、当初よりヘルツルらと軌を一にするものではなかつた。彼がゲルゾンのクライス乃至ヴェルクロイテを指導する際に強調したことは、ゲルゾンの証言によつても明らかであるが、それはシオニストである前にユダヤ人 (民族) であることをユダヤ教、聖書において自覚することであり、また先住のアラブ人との融和を図り、両民族による国家を設立することであつた。現実との対応でそれがどうなるうとも、終生彼の精神的シオニズムと言われる不退転の原理であつた。この観点から彼のヘルツル観があるのである。

先の会議で採択されたのが所謂『バーゼル綱領 (Basler Programm)』であるが、そこにもられたユダヤ民族のために公法によつて保証される家郷 (nationales Heim) をパレスチナに創建する、というスローガンは離散 (Diaspora od. Galuth) のヨーロッパのユダヤ人に、ドレフュス事件を越えて、一縷の新たな希望を与えるものであり、特に同化、ゲットーの別なく青少年層に将来の光明を期待させるものであつた。当時青年の一人としてシオニズム運動に参加したブーバーにも一転期となるものであつた。ユダヤ教へ回帰する、ここにヘルツルの政治的シオニズムと一線を画する基点がある。彼の偉大を認め、敬意を表することがあつても、根本の考え方で乖離を生ずるのであり、批判が生ずるのである。

ヘルツルは、眞のユダヤ人問題が内面的で個人的なものであること、即ちユダヤ人各個人が、自分の中にあり、これまで承継してきたユダヤ民族の特殊性である自らの内なる民族の伝統に対して見解を表明し、この者だけがユダヤ民族を確立するのだという認識を持つていなかった。その結果彼は『ユダヤ人国家』とその後の声明でも、その際最も注目しなければならぬユダヤ人の特性と創造性を見過している。彼にはユダヤ

ハシヨメル・ハツアイル系への転向を必然としたものである。現実への態度として確かにブーバーの精神主義的なものが否定されたが、ここで注意しなければならないのは、マルクス主義の唯物論的方向をとったとしても、それがただちにベンIIグリオンの主張する政治的シオニズムをとったのではないことである。ゲルゾンは終生ブーバーを自らの師とするとともに、彼の説く対話の精神を現実において実践的に高く評価している。³²つまりゲルゾンは政治的シオニズムを否定し、キブツ経営にブーバーの対話的原理を教育を通して生かすことに力を注いだのである。そこに冒頭でふれた五年五月十日付第三代イスラエル首相ザルマン・シャザールのブーバー宛書簡に対する彼の批判的感想があるのである。それは次のような内容である。

わが教師にして指導者、主筆にして友人であるM・ブーバー教授（恙無くご長寿であられますように、アーメン）

本日栄典授与に閣下しておりますエルサレム市参事会に、貴下を名誉市民に推薦致しましたお祝いを申し述べさせていただきます。貴下がこの榮譽ある称号を有する人々——ヴァイツマン博士、ベン・ツヴィイからS・J・アグノン師に至る、貴下と同じく生前授与の人々ですが——の数に加えられたことに対する私の衷心からの祝詞をお受取り下さい。

末長く現代を導く師であられますとともに現代を楽しめますように。創造的なお仕事のため、また聴講する学徒のために、ますますご健康で活躍下さい。³³

私との会見のその日、ゲルゾンは自分のブーバー宛書簡とこの手紙をその往復書簡集によって示しながら三つのことを言った。一つは彼自身のブーバーに対する敬愛の念、それに基づくマルティン・ブーバーの森

の献呈について、生前彼の健康な時に贈ったことを誇りとするということであった。第二はエルサレム名誉市民推薦は遅きに失するということであった。彼の死の一ヶ月前というのは餘りにも遅い。確かにゲルゾンらが青年の時、ドイツでの彼はユダヤ人青少年の絶大なカリスマ的指導者であったが、イスラエル移住は一九三八年と遅かったこともあって、彼の指導力は全くなく、その精神的シオニズムによる〈両民族国家論〉もマイナーな主張ととられた。エレッツ・イスラエルで彼の思想は人々に影響を与えること少く、人心を大きく動かすことはなかった。しかし現代の世界史的視野で見るとすれば、ブーバーの思想が世界的に評価されており、彼と比較できるユダヤ人思想家はいない。この視点からもイスラエル国内でもっと早く正当な評価がなされて然るべきであった。死を直前にしての名誉市民推薦は死亡後では不都合であると解される餘地があり、不純なものさえ感じられる。なぜこうなったのか。それが第三の〈事〉である。今回ブーバーの生誕百年記念学会が世界の研究者を集めてベルIIシエヴァの大学で開かれるが、私にも招待状が来た、しかし私は行かない、とゲルゾンは言った。なぜかと問えば、ベルIIシエヴァの大学は、初代大統領の名を冠して、ベンIIグリオン大学と称している、この名の大学に行くことはできない。何となれば彼はテオドル・ヘルツル直系の政治的シオニストであり、ブーバーの活動にことごとく反対し妨害した中心人物である。ブーバーがなる程ドイツの時と違ってパレスチナ認識に現実性を欠いていた故に過小評価されたことは否定できない。しかし彼は自説を撤回せず主張し続けた。客観的に見た場合、思想の偉大はここにある、然るにベンIIグリオンのや正統派ユダヤ人はこれを無視しかつ批難した。名誉市民推薦が死の直前というもの、この背景を無視することはできない。従って私はベンIIグリオンの大学の記念学会には出席を

いであろう。それが一九六五年二月六日付の冒頭で引用した彼の手紙におけるキブツ教員養成所オラニムにおける対話の重要性、実践原理としての再確認である。彼個人にとっても決定的であったことがわかる。そしてこの満腔の感謝の中に彼のキブツ経営、教師養成の基準がどこにあるか、またイスラエルという国家に対する視座がどこにあるかも読みとることができる。それはゴードンが「ブーバーの影響の下に、あなたがヴェルクロイテと呼ばれるユダヤ青少年運動を打ち立てたと理解するのですが」と言ったのを承けて、ゲルゾンが、

その通り。我々がブーバーに従ったのは、シオニズムに戻る前に、ユダヤ教に戻らなければならないという理念によるのである。それは同化ユダヤ人青少年のための運動であった。別な言葉で言えば、我々は当時イスラエルへ行くことを強調しなかった。イスラエルに移住する前に我々は自分らのユダヤ教に生きることを欲したからである。その時代我々が求めたことは、ヘルツルが主張した政治的シオニズムを思い描くだけではなく、そうでないからこそユダヤ教の原典を読むことに還帰することであった。政治的にシオニズムに向うことと異なると、このように生きるために原典に回帰するというのこそ、ユダヤ教〔民族〕に対するブーバーの重要な貢献である、と私は信ずる³⁰。

と言ったところに明瞭に示されている。ブーバーが当初よりヘルツルが主張したような、パレスチナにユダヤ人のみによって建設される『ユダヤ人国家』を否定し、〈両民族国家 (By-national-State, Bi-national-State)〉を主張してきた。これは彼の一貫して変らないシオニズムに対する基本信条であり、ドイツでのユダヤ青少年運動の講師としてハルーツを説いた時の精神的根幹となっているものである。既に一九二一年九月

二日カールスバートで第二十二回シオニスト大会が開催されたが、その時ブーバーは「シオニズムに対する大会覚書」という講演をしている。その中で彼は、

絶え間なく増え続けていく移住という形で行われていかなければならない、我々のエレッツ・イスラエルへの帰還が他民族の権利を侵してはならないであろう。アラブ民族との公正な同盟を締結することにより、我々が一緒に居住している場所を、経済的、文化的に繁栄する共同の国家 (Gemeinwesen) につくりあげようとするものであり、その成就是両民族の成員一人々々に何ものにも妨げられない自発的な発展を約束するものである。我々ユダヤ民族の救済と更新にのみ捧げられているような人植運動であつてならないのは、それが一領土の資本主義的搾取を目指すことであり、ある種の帝国主義的目的に仕えることであるからである。その意味は、両民族共同の国家が創られる大地に人間が自由に働けるようにすることである。我々のこのような民族的理想の社会的性格の中には、我々といま現に働いているアラブ人との間に、目下の混乱から生じた一切の矛盾は超えられなければならない。実際に両者の利害関係がやがて明確に永続的に深い共同の一致になっていくというのが、我々が確信し、保証するところである。このような連帯の意識から両民族の人々の心の中にやがて私的生活で確認される互恵と相互好意の気持が形づくられていくのである。そしてこうなつた時はじめて歴史的にはば両民族の再会が実現されるのである³¹。

と言っているが、ゲルゾンらはドイツにおいてこれを理想とし、パレスチナをエレッツ・イスラエルとすることにより、この精神においてキブツ建設を図つた時、アラブ民族主義において挫折したのである。それは正に理想と現実の巨大な落差の体験であり、マルクス主義のキブツ連合

学教授ハイム・ゴードンのインタビューに答えた回想の中から、主にエレット・イスラエル移住後のブーバーについてみるものとする。ゴードンがゲルゾンに、ブーバーが援助した最も重要な部分はどこかと質問した際には、

私がヴェルクロイテを結成した時に最も重要な援助を受けたと信じている。私の理論は青少年運動の理想は青年時代が過ぎ去っても、それが消え失せず、自分らの持つ理想を生涯を賭けて実現に向って持続していけるようにすることであった。このような私独自の考えをもってブーバーに近づいた際、彼はいつも私が申し出た問題に対して疑問に答え、解決を与えられない時でも、誠心誠意私を支えてくれた。

とブーバーの基本的構えに対する感謝を述べている。これはまたゲルゾンの彼に対する終生変らなかつた態度であつた。確かにドイツにある時は、同化ユダヤの青少年にとり、シオニズムの方向をとる前にユダヤ教に回帰することが必要であり、それによってヘルツルの政治的シオニズムを越えるハルーツの理念に立っていた、「ブーバーによれば、真の共同社会は二つの特徴を持つている。第一は一つの価値の中心に結びつくことであり、第二は共同社会における個人間の関係が直接的で形式ばらないことである。我々はユダヤ人として生き、働くことを願い、ドイツにあつてはイデオロギー的には社会主義者と共産主義者の間に位置する小さな党派を連合しようとした」こともあつたが、パレスチナの現実では、先にも述べたように、宗教的社会主義を実現不可能なユートピア思想として退け、マルクス主義のキブツ連合に入り、ゲルゾン自らの立場をとる。思想的に訣別となり、両者はイデオロギー的には対立した関

係となる。そこにゴードンが「ブーバーはあなたの政治的観点からそんなに離れていたのですか。それはなぜ彼があなたがハシヨメル・ハツァイルのキブツ運動に参加するのに反対したか、ということですか」と聞く理由がある。これに対して彼が、

いや、反対したのではない。かつて彼はハザンと私自身に、対アラブ問題に対する姿勢の故に、いつも我々の政党であるマパムに投票してたと語っている。だがそうであつても我々の掲げる理念の幾つかには賛成できないし、それ故に党員になることはできないとも言っていた。しかし彼は我々に票を投じ、少くとも評価の面で、政治的敵対者とみていたベン・グリオンには反対していた。彼はベン・グリオンが開拓者であるハルーツの意義を低くみていたことを怒っていた、またベン・グリオンが対アラブ問題を処理した方法についても怒っていた。

と答えたことは、ブーバーの対ベン・グリオン観のみならず、ゲルゾン自身の両者への態度表明の根本的なものに関わるので検討しなければならぬ。

キブツ・ハレツアは「働く人」のメンバーによつて結成され、一時ブーバーとの思想的離反があつたとはいへ、ブーバーがゲルゾンの思想と行動に決定的な影響を与えたことを否定できないのは、先に引用の彼の言葉からも理解できるが、その中核となるものが、共同社会構成の原理として、価値の中心即ちユダヤ教の原点ヤハウエと結びつくことと、構成員個々の直接的な形式張らない交わりを持つこと、即ち対話的原理であることは確認しておく必要がある。ゲルゾンがイデオロギー上ブーバーと対立した時も、この我—汝の対話の思想は個の実存の原点、社会的共同性の根底にあるものとして持続されていたことは否定できな

これによりゲルゾンのブーバーへの姿勢とシャザールの書簡への批判的感慨が、単に判官贖身的なものでなく、事実即したものであることが明らかになると考える。

〔一〕 さて彼が青年として決定的に精神的転回をしたのは、既に述べたように、ブーバーとの出会いである。近代ユダヤ青少年運動がワンダーフォーゲル運動の影響を受けたことは今更言うまでもないが、ドイツとオーストリアのユダヤ人の青年の多くはブラウニッシュヴァイス団 (Braun-Weiss) に参加していた。それはプラーゲで生まれたパール・コクバ (Bar Kochba) 運動の延長上にあるものであった。これらはドイツ青少年運動と共通しつつ、聖書、ユダヤ教、シオニズムにおいてユダヤ的色彩をもつ独自の青少年運動の路線を歩み、ベン・シエーメンの志向する方向をとるようになる。エレツ・イスラエルへのハルーツであるが、同時にそこにはドイツでの共生への志向もあったのである。ゲルゾンがドイツ系ユダヤ人徒歩旅行団の一員、ヴィカードルフ自由学校共同体また青年運動の指導的教育者 G・ヴィネケンに教わる者としてブーバーの前に現われた時、彼はユダヤの根源へ回帰しつつブーバーの理念で両面の実現を求めていたとは考えられる。勝義にはユダヤ的側面を鮮明にしなからドイツとのアイデンティティを求め、ブーバーからの教えを通してこれとの共存を志向していたと考えられる。そのような中で先の年長の商人団員との間に意志の差異が問題になったのである。それを克服できたのは流謫地 (Galut) にあっても彼らを支えてきた存在の伝統 (Seinstradition) を説くブーバーの対話的原理であり、その教育活動であった。そしてそのような中でゲルゾンをリーダーとする「働く人」の活動もドイツ文化と同一性において展開し、ヨーロッパ文化に対するドイツ文化の一寄与ともみられたのである。

しかし一九三三年一月末のヒトラー政権の成立はこの同一性を否定し、公然と反ユダヤ的活動を行うことにより、精神的伝統としてのユダヤの実存が根柢より問われることとなり、ヴェルクロイテもハルーツによるキブツ設立にその存在を賭ることとなる。同年四月満場一致で可決。イズレルの谷への入植、キブツ・ハズレアの建設となる。ここにドイツとは違った状況の中で、ゲルゾン自身の立場の変化、ブーバーの思想との対応の変化、更にはその亀裂さえ生ずる事態となる。過酷な自然的、対アラブの民族的対立がブーバーの精神的シオニズム、両民族国家論、ユートピア的社会的構想の無力さとブーバーのカリスマ的指導性とを虚無化し、ゲルゾンのリーダーシップもまた凋落していくのである。彼自身マルクス主義的社會思想へと向っていくのは、ハズレア自体ハシヨメル・ハツアイルに加入することにより必然であった。その中でゲルゾンとブーバーの関係もまた理想と現実のズレの中の対応であった。いまこれをここで詳細にその軌跡を追うことはできない。

というのはゲルゾンのパレスチナ移住後ブーバーとの文通は、現在の『往復書簡集』第三巻には本論冒頭引用の他三通 (ブーバーから二、ゲルゾンから一) のみで、その中の二通も主にゲルゾンが三九年に刊行した著書『Der Faschismus, Ursprung und Wesen』(Merchavia) に関するもので、本論に資するものではない。ただ移住後ブーバーの宗教的社會主義の立場を棄て、マルクス主義に向ったゲルゾンが「もし誰かが言うように、先生が私を『放蕩息子』のように思われておられるのなら、悲しいことです」と言っているのは注目に価する。現実の挫折からイデオロギー的には、ブーバーの思想から離れ、より有効な手段をとったゲルゾンでも、人格的には尚もブーバーに繋がっているものであり、師弟としてあるのを望んでいるのである。従って直接的ではないが、晩年ベン・グリオン大

Gemeinschaft.

BEWÄHRUNG

Gespräche mit dem Gegner.

これをみれば十項目の増補が行われているように見える。第二部「限界」の部は全て増補である。しかし第一部「記述」の部の「Die Zeichen」は雑誌の「Der Mensch in der Anrede」の表題変更であり、また、第三部「確証」の「Gespräche mit dem Gegner」は雑誌天尾の「Der bedingte Mensch」の表題変更であり、前者と同様内容的には変改はない。従ってゲルゾンが読んだのは著作集の「反対者との対話」であるとシェーダーが註記するのは、現行を基準とすれば差支えないかもしれないが、正しくは「制約をうける人間」を読んだのである。細かいことかもしれないが、コメントするのは、後者は著書として整然と配列されているが、厳密には体系的記述ではない。これに対して前者は思いつくままの態をなしているが、全て『我と汝』の論旨の補正であると同時に、現実との対応での記述であり、特に末尾の長文はゲルゾンの問への回答と意識して書いたものにとることができる。配列が荒削りであっても、前から読み通せば臨場感をもった一種の迫力さえ感じられる。そしてここにゲルゾンの満足感とブーバーへの敬意の表明となっている、と解することができるであろう。いまここで「反対者との対話」について詳論する必要はあるまい。但し、反対者の多くの立脚点が、生活〈現実〉の重視、即ち共通の経験のズレの指摘からの批難であるが、ブーバーはそこにこそ対話の必要性を説き、困難な状況の中で存在の意味を求め、事物や出来事の中で人と向い合い、そこから神と人間の間の対話を実現し、人間であることの責任を果すことを訴えているのである。ある意味でゲルゾンのカメララード

ンの一ブントとしてのクライスのリーダーへの示唆を与えるものであった。しかもこれはドイツでの活動における一つの統合への道を示すものであった。そしてイデオロギーの対立を越え、フリードマンも言うように、ゲルゾンの「働く人」は他のハルーツの諸集団より、年長者のメンバーとの折合いに成功し、彼らを十分に納得いく活動に参加させ、ハルーツを推進していくのに唯一成功したグループだったのである。²⁵

以上において、一九六五年二月六日付ブーバー宛ゲルゾンの手紙の考察を終る。彼の感謝と教育における対話の認識の背後には、両者を囲む史的事実と精神的交流があった。これを明らかにすることによって、ゲルゾンの手紙は立体的に理解されると考える。彼が私へ話した時は、正にその史的意味においてブーバーとの関わりを述べたのである。そこにこれとは全く対立するかのようにあるザルマン・シャザールの書簡に対する彼の感慨もあるわけである。

三 シャザールの書簡の周辺と対応

シャザールが第三代大統領としてブーバーへ宛た書簡はブーバーの死の約一ヶ月前のものである。四月二十六日夕刻ブーバーは汀って腰の骨を折るといふ重傷を負う。手術により快方に向うが、長年患っていた腎臓病が悪化し、六月十三日尿毒症で死去する。つまり書簡はこの間のものであることに注意されなければならない。ゲルゾンはこの点に留目してこの手紙について話したのである。

そこでシャザールの書簡を検討する前に、前章と若干重複はするが、ゲルゾンが自己のブーバー観をどのように形づくり維持していったかを史的に辿りながら跡づけ、書簡の背後にあるものをみていくものとする。

いるのを放置することはできない。直接の回答は留保したが、一九三三年以来明確に我―汝の対話的原理をもって、ソリプシズム的な近代的自我を超越して対話的実存の人間観を提起したブーバーにとって、ゲルゾンへ責任ある回答をなすのは当然である。そしてこれに答えたのが、二九年『被造物』に発表した論稿「対話 (Zwiesprache)」である。それをベルリンのシュッケン社から三二年に刊行し、三四年現在著作集第一巻にもみられる形となったのが増補版の『対話』である。

一九三〇年二月六日付ブーバー宛書簡でゲルゾンはブーバーとの関係に対する感想とともに、この論文を読んだことを述べている。即ち「時々私は、何度も新たに、私の生活の中に先生が現にいらっしやるといふことを、生活の中心となつていふと意識するようになりました。先ごろ、先日はじめて先生の御論稿『対話』を読ませて戴きそう感ずるようになりました。私は御論稿の中に、既に私が質問いたしましたことについて、実に多くの解を見出すことができました」と。この一節を見る限り、ブーバーがゲルゾンの質問に対する返事で留保したことが解決している。どの部分を読んで満足したのであるうか。

この点について手掛かりはある。ブーバーの返信に往復書簡集の編者グレーテ・シェーダーが註を付しているのがそれである。そこには「Vgl. den Schlufabschnitt」《Bewährung》in: Zwiesprache (Die Kreatur III), I, 208ff.; wo Buber in der fingierten Gestalt des Adversarius 《des ehrlichen Gegners, einen Teil von Gersons Fragen aufnimmt und behandelt. <…> 真摯に対論する〈反対論者〉を仮定した形で、ゲルゾンの質問した部分を取扱っているのが、『対話』を載せた雑誌『被造物』の第三巻、著作集第一巻二〇八ページ以下であるといふのである。『被造物』は当時ラムベルト・シュナイダー社から刊行されたが、一九六九年クラウス社 (KRAUS RE-

PRINT, Nendeln / Liechtenstein) から復刻されている。架蔵のそれによって調べると「対話」は第三巻の二〇一ページから二二八ページにかけて載っている。しかしそこには本文末尾にあるという《Bewährung》の表題はない。著作集に掲載されているだけである。『被造物』が一般には入手困難な今日においてシェーダーの註は著作集を中心として妥当であろうが、些かのテキストクリティクは必要である。両者の内容構成をみてみなければならない。『被造物』では次のようになっている。

Urerinnerung. Das mittelnde Schweigen. Meinungen und das Faktische. Religionsgespräche. Fragestellung. Beobachten, Betrachten, Innwerden. Der Mensch in der Anrede. Wer redet? Oben und unten. Verantwortung. Der bedingte Mensch.

単行本としての三四年刊の増補版は未見であるが、その後の一卷本著作集 (例えば一九六二年刊の《Das dialogische Prinzip》など) をみても、著作集第一巻所収の配列と変っていない。後者は全体として字句上の加除訂正が行われているが、内容的には相当の増補の他、表題の変更も行われている。増補・変更をイタリックで示す。構成は三部からなっている。

BESCHREIBUNG

Urerinnerung. Das mittelnde Schweigen. Meinungen und das Faktische. Religionsgespräche. Fragestellung. Beobachten, Betrachten, Innwerden. Die Zeichen. Eine Bekehrung. Wer redet? Oben und unten. Verantwortung. Moral und Religion.

BEGRENZUNG

Die Bereiche. Die Grundbewegungen. Die wortlose Tiefe. Vom Denken. Eros.

と、またこれに則って何かをやることは到底できないというのが現状である、経済的に急迫している現在、職業上において自分らが望まないものに苦しめられるのは避け難いのが現状である、しかも僅かな餘暇の自由時間さえ仕事をしなければならぬ状態である、職業教育の勉強、疲労、日常の大部分が仕事々々で無意味にすぎ去っていることの絶望がこれを妨げている、しかもそれどころか十時間労働後に与えられる自由時間などはほんの僅かなものであり（かつ労働時間はしばしば十時間を越えている）、改良の可能性は指導的立場にない人には無いも同然で、あってもほんの僅かではない、と。

「同志」の三分派の中の最大の「仲間」のリーダーであるゲルゾンが直面したものは、がっちりと固められている現在の経済的機構とのこのような成員たちの絶望的な衝突である。右にみるように、商人を中心にした年長の加盟員たちとの話で、十時間に及ぶ、否それを越える過重な労働の問題、何かをしようとする場合の経済上の問題を彼らが持ち出し、そこから運動の発想をするので、全体的な運動の求める目標や方法について、両者間に絶望的と思われる程の対立と差異が生ずるのが現実である。ゲルゾンは打開できさそうもないうんざりするような運動の状況をどのようにして克服し、統一的な見解と行動を創り出し、円滑な運営をしたらいいかブーバーに助言を求めているのである。

凡そ一つの集団が共通の目標も持ち、これを達成し、その包懐する理想を実現して行動している時、意見の対立が構成員の思想信条や出自において対立するのは、集団の分裂のみならず、運動の自滅に至りかねないが故に危機である。その統轄責任者にとって責任上深刻である。また精神的シオニズムの立場からカリスマ的にドイツ系ユダヤ人青年の運動を指導しているブーバーにとって、愛弟子の運動に蹉跌が生ずることが

あつては、全運動に波及しかねない恐れがあるので、これに慎重に対応しなければならぬのは当然である。ブーバーのゲルゾンへの回答は状況から遅すぎることはできないので、取敢ずではあるが、直ちに書かれた、と見てよいであろう。

親愛なるゲルゾン君

貴兄が遭遇した商人たちとの問題について、彼らがどうしてそうなたかを、いま貴兄が納得するように詳しく返事を書く時間がない。貴兄が直面しているような場合はこれまで私にもあったが、私はいつも個人的な状況が試されているのだととって、それが時たま最初は非常に（抽象的に）示されていても、何とか具体的なもの（人間と事物に対する直接的関係）としてとりあげるかまたそれだけのものであるかを確かめてきた。一般的に言えるのは、貴兄の場合も「精神」が大切なことだが、先に言ったように時間がないので、（ここで）意見を言うのは差控える。

右に見るように、ブーバーはゲルゾンの当面の試練に同情しつつも、ドイツにおける迫り来る民族的危機を予感するかのよう、F・ローゼンツヴァイクとのドイツ語へのヘブル聖書の翻訳、季刊誌『被造物（Die Kreatur）』の編集・発行、著書執筆、フランクフルト大学やユダヤ関係機関での講義や講演に追われていたので、直接助言的の回答はできなかったのである。しかし彼はこのような言訳で回答を打切っているのではない。一つの理想を実現する際、前述のような、集団内での意見の差異、対立が生ずるのが常である。ましてやゲルゾンのようにブーバーの精神において理想を設定し、これを実現しようとしている時、その背後事情はどうあれ、反対意見が出て、その運動自体が挫折しかねない事態になって

つても、ブーバーがパレスチナ移住において強調した〈宗教〉なるものが、この過酷な大地では全く精神的光輝を失ったことである。その結果生じたことは、一つはブーバーの精神を高く揚げてきたゲルゾンのリーダーシップの下降である。今や集団の中に指導者の選定を、現状に卓越した識見をもつ、これまでと違った資質をもった者をとつた要望である。もう一つは一九三八年ブーバーがエレッツ・イスラエルとしてのパレスチナに移住した時、ドイツでの声望とは全く違った評価が象徴しているように、「働く人」の方向が、ブーバー的志向（宗教性の強調、両民族国家（by-national-State）観等）を非現実と否定した路線をとり、自然と対アラブの現実に対峙したことである。即ち彼らは既に先住の移住者たちにとられていたマルクス主義・社会主義的なキブツと宗教的・ユダヤ教正統派的キブツのいずれをとるか岐路に立たされたのである。新しいキブツの設立はこの二つの方向選択にかかっていたのであるが、「働く人」の構成員はユダヤ的伝統に対して、それぞれ異なった態度をとりながら、自らの立場を選択したのであった。ゲルゾン自身にとつても困難な危機に立たされたのであるが、最終的には、そのイデオロギーが、ブーバーなどの精神的なものより、政治的側面の強いシオニズム、それとの関連で必然的な唯物論的路線即ちマルクス主義的・社会主義的なものとなり、基本方針をマルクシズムにおくハシヨメル・ハツアイル（Ha-Kibbutz ha-artzi ha-shomer ha-atzai）青年守備者）の運動に併合されていく。ゲルゾンもまたマルクス主義的立場をとるようになる。

〔三〕 かくて右のような史的状况の中で、老年と云われるようになる五十年代後半のゲルゾンが前記書簡の中で「如何に先生が私の生涯また世界観の上に深く影響を与え」たか、そして「その都度教えて」くれたことを回想し感謝していることは、単なる師弟の関係を越えて、ドイツ

とイスラエルにおけるイデオロギー上の史的意義と評価の問題があると言わなければならない。しかもそれはブーバーが一貫した宗教的態度を持ち、精神的シオニズムをとり、両民族国家論を構想したのに対し、ゲルゾンはブーバーの講演と著書によりユダヤ教へ回帰し、宗教的覚醒を自覚したにもかかわらず、エレッツ・イスラエルでは過酷な現実の中で、理想と現実の矛盾に苦悩し、無神論・唯物論に傾斜している。ブーバーに離反しつつもなおブーバーへの回帰を自覚しているところに、ゲルゾンのキブツ形成のバックボーンが見えるように思われる。これを踏えて両者の関係を整理して検討しなければならない。

これは大きく二つに区分すればよいであろう。第一はゲルゾンがブーバーと交渉を開始した一九二六年から二四年のパレスチナ移住までの間、その二はその年の移住後ということになるであろう。ただここでは二つの時期を詳論するのではなく、各時期における理想と現実の困難な事例においてこれを見るものとする。まず前者の場合であるが、一例として二九年三月二十八日ブーバー宛ゲルゾンの手紙と同年四月四日付ブーバーのゲルゾンへの解答についてみる。

ゲルゾンは再度ブーバーに手紙を書かなければならないと言いながら、これまでもしばしば悩み、現在も苦悩している問題があるという書き出しで次のように述べる。

プフォルツハイムで数名の年長のカメラデーデン所属の商人の人々と話をしました。対話は関心があることなので活撥に行われましたが、その中で彼らは次のように言っているのです、即ち自分たちはどう生きていかなければならないかという生き方、即ち我々の目的を見極めるところまで進めていかなばなるまい、しかしこれを遵守していくこ

実な問題として意識されたのである。それとともに実践活動の面ではヴイネケンの学徒として、ドイツ青少年運動の精神をドイツ系ユダヤ人の徒歩集団である「同志」のものとしようとさえしているのは注意されなければならない。実際大きく分ければ三系統になる、この集団の中で最も重要な一部をなしていた「仲間 (Kreis)」を指導していたのも彼であった。このような時彼はブーバーのハシディズムに関する著書やユダヤ教に関する論文集を読み、「我々の課題としての民族教育 (Volkserziehung als unsere Aufgabe)」という講演を聞くことにより、先の二つの体験を統一した信条を自らの中に確立する契機を見出したと言えるであろう。彼はブーバーの思想の中にクライスのリーダーとしてのバックボーンとなるものを見出したのである。即ち拘束された労働に従事し僅かばかりの自由しか得てない者たちに、一般にブーバーの言う対話の生活は可能であるのか、また対話の求める価値理念が、共産主義やシオニズムが内包する理念と対立することはないか、また社会の革命、民族の理念を実現しようとするなら、そこに要請されるのは全人である、この人間像のために、パレスチナへの移民、入植のための経済的準備、手作業の訓練を超えて、ユダヤ教の学習を聖書、ユダヤ史、ヘブル語に行うことが大切であるのかどうか、について、ブーバーのユダヤ教の解釈、ハシディズム思想、聖書解釈と対話的原理に、解決の方途を見出したのである。そして彼に直接学ぶことにおいて、自己の青少年運動の一指導者としての実践的思想形成が深まると確信したのである。弟子入りの申込みはそれ故に必然であったと言うべきであろう。端的に言えば、ゲルゾンの課題意識は現代におけるユダヤ人の状況と時代の一般的危機への対応によるものであり、これを解決する鍵をブーバーの思想にみたのである。彼はこれにより、新しい共同社会構成のために必要なものと各個人の生活

を根本的に方向づけるべく、リーダーとして情熱を注いでいくことになる。

しかしドイツ在住におけるユダヤ青少年運動の一環としてのゲルゾンの活動の上にやがて転機が訪れる。即ち一九三二年ドイツ系ユダヤ徒歩集団 (Deutschjüdischer Wanderbund) である「同志」は、前述のように、三つの組織に分裂するが、その中の最大の組織が「働く人」となるのであり、「仲間」はこれに属し、ゲルゾンがそのリーダーとなる。その名は正式には Werkleute, Bund deutschjüdischer Jugend であるが、三三年に決定的な転機が訪れる。一月三十一日 (悪魔の代理人 (advocatus diaboli) であるヒトラーのナチ政権・第三帝国の出現である。これにより、「働く人」は Werkleute jüdischer Jugend へと改称する。この名称変更は方向転換を象徴している。ヒトラーが政権掌握の翌日「働く人」は従来のドイツでのワンダーフォーゲルにならった青少年運動の方向を棄て、イスラエル移住を目的としてシオニスト運動 (Chalutz-Zionist Bewegung) となるのである。そしてパレスチナ移住を集団で行うことを決意するに至る。彼らはパレスチナに独自のキブツを設立することを希望した、ゲルゾンは三四年仲間とともにドイツを去り、同年かのキブツ・ハズレアを設立するに至るのである。この地でゲルゾンが見たものは、過酷とも言えるアラブとの激烈な対立を含んだ未開原始の現実の真相であった。ドイツにおいてブーバーがカリスマ的に説いた状況とは似ても似つかぬ、餘りにもかけ離れた現実であった。不馴れな困難を極める肉体労働は、ブーバーが強調した餘暇に精神的活動を行うなど、およそ不可能な日々であり、脱落者が出るのも必然の成行きであった。仲間の一部は熱病と疲労困憊により拉し去られたのである。ここに「働く人」のメンバーに重要な意識の変化が生ずる。このキーポイントとなるものは、何とい

角に〉 Izer Mordkai Martin Buber / Forest of Martin Buber へとヘブル語と英語で刻まれた石碑を見た。これを見た時、ゲルゾンが次の大統領シャザールの書簡に言及しながら、自分のブーバーに対する姿勢を、一種の矜持をもって語ったことの自負とある意味での回帰を知ることができたように思えた。それが彼の手紙の後半部分の告白の吐露とキブツ教員養成の基本方針の表明である。

ブーバー宛のこの手紙を書いた時、ゲルゾンは五十七歳である。生理的に老いが自覚される年代である。そのような時、ハゾレア運営の指導者、オラニムにおけるキブツ教員養成の仕事に当たってきた、彼の回顧的反省が後半の文章に表明されているのであり、ブーバーへの学恩の感謝とともに、彼の根本思想の再確認と人間教育のための再評価が端的に述べられているのである。

〔一〕 前述のようにブーバーの講演に感動し、ユダヤ人としてあること
の決意によりゲルゾンが彼の指導を求めたのは一九二六年十一月末の（一）であった。その手紙で彼は〈Als langjähriger Anhänger der deutschen Jugendbewegung, im deutsch-jüdischen Wanderbund 》Kameraden《, als Wyneken-jünger 》 As a longtime adherent of the German youth movement, through my membership in the German Jewish hiking club Kameraden and as a disciple of Wyneken へとユダヤ人青少年運動に関わる者として自己紹介をしている。ゲルゾンが「同志」に所属していたのは、一人の青年としてドイツ青少年運動の典型としてのワンダーフォーゲルと一〇年代から三〇年代の精神的状況との対応における〈事〉として理解されなければならぬ。ワイマール体制の中での政治経済の困乱、新田価値観の紊乱と頹廢の現実から、人間的自覚による責任ある新しい社会の形成を、自分の眼で自分の国の各地を見、認識する姿勢によって実現しようとした一

環にワンダーフォーゲル運動があったのであるが、ユダヤ青少年運動もその精神的影響から生まれたのである。しかし彼らが対面する問題状況は自ずと異なる。彼らの目的はヨーロッパ社会にあって、〈同化〉や〈脱ユダヤ化〉を推進することではない。ヨーロッパ社会にあって、自分がユダヤ人であることの存在理由を根源的に問い、どのようにしたらこのアウトサイダーとしての現状の不条理を克服できるかでなければならぬ。ヨーロッパ諸国が近代的な国民国家としての境位を確立しつつある時、自らの民族的國家を持たない寄留の民としてユダヤ人の存在をどう定位するかが焦眉の課題であり、その青少年運動もこれを内包したのである。ゲルゾンが所属する「同志」は、一九一三年ホーエ・マイスナーで設立されたドイツ青少年団運動の理念に範をとり、一六年プレスラウでその他のユダヤ人の青少年団運動として結成され、一九年に全国的規模で運動を開始したものである。また彼が自らを〈Wynekenjünger 〉 a disciple of Wyneken 〉 というのは、ドイツの教育者で哲学者であったグスタフ・ヴィネケン (Gustav Wyneken, 1875-1964) がパウル・ゲーブ (Paul Gehep, 1870-1961) と共同でヴィケルドルフに自由共同学園 (Freie Schulgemeinde) を設立、一九〇六年から二〇年まで校長の任に当り、教育目的を國家・教会・社会の一切の干渉を排除した、自律と自己活動に基づく〈客観的精神〉により自由教育を実現することにおいたが、この思想に感銘したゲルゾンがヴィネケンに師事したということである¹⁰⁾。

十代後半のゲルゾンがこの二つのことを実践的に体験したということは、ブーバーに出会う以前の精神形成の事実として重要である。彼はヴィネケンの学園の教育を受けることにより、自主的・主体的人間像を自己のものとして形成しようと自覚する時、自己の出自を根本的に問うことと、ユダヤ教の根源とその伝統の把握は解決されなければならない切

していた。この背景を知るためには、ルックナー (Gertrud Luckner, 1900-) の一九六三年四月三日付ブーバー宛書簡とシェーダーのこれに関する文章をみる必要がある。まず彼女の手紙をみる。¹⁵⁾

敬愛するブーバー教授

オランダのエラスムス賞並びにその他多くの榮譽を得られましたことに心よりお慶び申し上げます。さてドイツ在住の先生を敬愛する方々やご友人が自発的にマルティン・ブーバー博士の森に植樹することを望み、また先生に対するこの榮譽がイスラエルを築きあげていくことと結びついているのを手紙でお伝えできますことは私の大きな喜びとするところであり、名譽とするところでございます。

イスラエル建国ユダヤ国民基金 (Keren Kayemeth Leisrael) は丁度いま新しいマルティン・ブーバーの森が併合されるでありましょうエルサレムの森の計画見取図を送って参りました。

先生にとりまた私どもにとりまして特に喜ばしいことは、ゲアルディニ教授がこの森のための請願を起草してくれたことでございます。教授が望んでいますことは、ご自身の氏名が他の人々の署名の中にアルファベット順に記入されることであります。ゲアルディニ教授の了解の下にお伝えするのですが、氏がこの請願を書きましたのは先生への友情からであり、他方人目に立ちたくない意向からとのことでございます。ゲアルディニ教授は昨夜請願の草稿は既に書きあげており、数日中に私のところに送付する旨電話を下さいました。ユダヤ国民基金の了解のもと、私が企画の事務の面を担当する予定になっております。

先生がエラスムス賞受賞のためにオランダにご滞在になる折、私どもは当地で先生にお目にかかる喜びが与えられるのでしょうか。

ハ)の手紙で重要なのは) Eben sender mir der Keren Kayemeth Leisrael eine

Pla-Skizze des Jerusalemer Waldes, in den der neue Martin-Buber-Wald

eingegliedert werden könnte. () The Keren Kayemet le-Yisrael has just sent me a sketch of the Jerusalem forest of which the new Martin Buber Forest might become part. ()である。この文章をみる限り、六三年の段階ではルックナーの手紙にみられる通り、ブーバーの意志とは別に、彼を記念する森は国家基金によりエルサレムの森の一環として植樹されることになっており、しかもカトリック神学者であるゲアルディニ (Romano Gardini, 1885-1968) が設立請願の基本的役割を演じていることは、この事がイスラエル自体にとって決して小さな事業でなかったことを示している。しかしシェーダーの伝えるところによれば「ブーバーがその死から程遠くない頃、彼の榮譽を記念して寄贈される森をどこに設けるかと問われた際、ハズレアに設立するよう決断したのであって、エルサレムの周辺ではなかった」¹⁶⁾のである。その後どのような経緯があったか、資料的には探ることができないが、彼の死後五年たった一九七〇年十月二十九日「マルティン・ブーバーの森」の式典がハズレアで厳粛にとり行われたのであった。その式典に参列して故人を讃え祝辞を述べようとしていた大統領シャザールは病床にあったため、先のゲルトルート・ルックナーが出席し、ドイツに寄付を求める請願を読みあげたのであった。¹⁷⁾

六五年六月十三日にブーバーは死去しているので、ゲルゾンが希望したこの年の春の植樹祭に出席したかどうかは不明である。会見の時彼に聞かなかつたので何とも言えないが、不可能であったように思われる。¹⁸⁾しかしこの手紙の以前にブーバーに関係団体から、森の献呈また場所の選定に問い合わせがあり、前述のように、彼自身の申し込みでハズレアに決定したものである。この決定については、イスラエル移住後のブーバーの屈折した心情を伺うことができる。ゲルゾンと会見した日の午後、彼の言葉に刺戟されて、私はキブツの住居の西側の小高い岡の松林の一

記のように〈先生〉という呼びかけをもって代置し、彼の位置を確定した。ブーバーがゲルゾンから〈先生〉と呼ばれるには二つの理由があるからである。その一つはブーバーの死後であるが、一九七八年、彼は三四年ユダヤ青年団「働く人 (Werkleute)」のリーダーとしてパレスチナへ入植、ハゾレアにキブツ・アルツィ系のキブツを形成、爾後これの経営と指導の任を果してきたが、その自負がスパイロをはじめとする、外部の者のキブツ滞在調査等によるその調査研究 (Vgl. Melford E. Spiro, *Kibbutz, Schocken, 1963, etc.*) を批判して、内側からの客観的な研究として『Family, Women, and Socialization in the Kibbutz, Lexington Books, 1978』を刊行したことの中にある。本書はブーバーに捧げられ、献辞には『To the living memory of my great teacher, Martin Buber へと記されているからである。ここにみられるようにブーバーはゲルゾンにとつて、紆餘曲折はあったが、生涯に亘り、偉大な師であったのである。しかもそれは回顧からの情念的なことではない。それがもう一つの理由であり、しかも二人の關係の始源的なことである。一九二六年十一月二十五日付ゲルゾンがベルリンからブーバーに宛た最初の長文の手紙の中にそれは記されている。

ゲルゾンは当時十九歳、ベルリン大学哲学科の二年生、将来ラビになる目的でユダヤ専修学校にも通っている、ドイツ青少年運動のワンダーフォーゲルに刺戟されて成立したドイツ系ユダヤ人ワンダーフォーゲル「同志 (Kameraden)」に所属する、ヴィネケン所属の一員 (Wynkenjünger) でもあった。ユダヤ的なものを維持していたとはいえず、精神的には西ヨーロッパ在住のユダヤ系に多くみられる同化ユダヤ人の境位にあったとみてよいであろう。しかしその時から四年前ブーバーの一九二二年刊の『偉大なマギドとその弟子 (Der große Maggid und seine Nachfolge)』の序文とユダヤ教に関する『三つの講演 (Drei Reden, 1911)』²¹を手にすることにより、

ゲルゾンは決定的な転向を体験したのである。即ちユダヤ人であっても同化ユダヤ人として、一般的なヨーロッパのキリスト教文化を何の抵抗もなく享受して完全に非ユダヤ的になっていた彼を、根源的にユダヤ教にたち帰らせたのである。全く新しい世界の開顕、觀念の世界から実在の世界の像を眞の現実と認識するに至ったということである。それは決定的な〈宗教的体験〉と言つてもよいものであり、このような中で彼はベルリンで直接ブーバーの講演を聞いたのである。この講演によりゲルゾンは人格的かつ運命的に心に訴えかけられるのを感じ、ブーバーの弟子となる決意をしたのである。この内的体験と実存的な決意が彼をして「このようにして先生は私にとつて決定的な指導者となられたのです (So sind Sie mir zum entscheidenden Führer geworden)」²²と言わしめ、以後ブーバーの弟子としてユダヤ青年団「働く人」の指導を受け、パレスチナ入植へ向つてリーダーとして活動するのである。

この二つの事例をみる限り、その後実践と思想との矛盾乖離が生ずる故に二人の交渉に幾多の葛藤・曲節があり、離反する時期 (ゲルゾンらのパレスチナ入植後) があつたとしても、ゲルゾンにとつてブーバーは終生の師である。従つて彼がブーバーへの手紙を常にヨーロッパ的常套の表現により『Lieber Herr Buber へと書き記すとも、邦訳の場合冒頭の訳出が妥当と考えるものである。しかも書簡中の『ein Lehrer und Lenker für die vielen Menschen zu sein, die zu Ihnen kommen, um sich Rat zu holen. < to be a teacher and a guide to the many people who come to you for advice. への言葉も以上を証左するであろう。』

次に第一段落末尾の『der Wald auf Ihren Namen < the forest bearing your name への森についてである。これは私がゲルゾンと話した際、この森の由来について述べるとともに、これがハゾレアにあることを誇りと

た。日本からは当時同志社大学教授であった平石善司博士と私が出席した。その際は当時の研究上のこともあり、事前にブーバーとシオニズムの関係、特にドイツにおいて彼が指導した、パレスチナ入植を前提とした、ユダヤ青少年団運動との関わりで、ハイファに近いエズレルの谷に面したキブツ・ハゾレア (Hazorea・たね播く人の意) に、「働く人 (Werkeute)」の団長であったメナヘム・ゲルズンを訪ねた。七七年十二月二十三日の午前九時から約三時間彼の自宅で会談した。その際彼が特に熱をこめて話したのは、ブーバーの往復書簡集第三巻を手にし、末尾にある二通の書簡を中心にしてであった。それは同時に前記学会に招かれていながら出席謝辞の理由でもあった。

その二通とは往復書簡集第三巻書簡番号五五四の六五年二月六日付のゲルズンからブーバー宛のものと、番号五五五の五月十日付の当時のイスラエル首相ザルマン・シャザール (Schneur Salman Schasar, 1889-1974) からブーバー宛のものである。二六年ベルリンからブーバーに最初の手紙を書き、その弟子として三四年パレスチナに入植しキブツ・ハゾレアを設立して以来、当時までのゲルズン自身の思いがそこから湧き出てきたのである。彼のコメントを交えてその内容をみていくならば、それまでの実践と思惟の経緯からの彼のブーバーへの思念が浮かび上ってくるように思われるのである。前者からみていく。

〔一〕 敬愛するブーバー先生

心より先生の誕生日にお祝い申し上げたく存じます。特にご健康で無病息災であられますよう祈念申し上げます。先生に助言を求めてやってくる多くの人々に、これからも、教師また指導者であって戴きたく期待しております。更にご尊名を戴いている私どもの森の植樹が行われるこ

の春にハゾレアに先生をお迎えしたいというのが切なる希望であります。本日は少々お話し上げたいことがあるのをお赦し給わりたく存じます。私も齢を重ねるにつれ、如何に先生が私の生涯また世界観の上に深く影響を与えられたかを感じられるようになりました。現在私が切実に感じていますことは、他者との出会いが如何に重要であり、また対話が如何に重要であるかということです。これを私は日常の生活の実現されるべき哲学的態度とも実践的原理であるとも考えております。オラニムの仕事では志を同じくする仲間たち (Chaverim, comrades) との出会いを深め、直接に交わる関係を作りたいと考えております。またその教育を推進していく際にも、大旨対話をベースとして行っているところです。これに対する教員や生徒たち多くの反応は、これが如何に大事であるかを示しております。時に応じてその都度先生が私に教えて下さいましたことに感謝申し上げます。——他の多くの点でもそうであったことは申すまでもありません。

近日中にエルサレムで先生と再会できますことを鶴首しております。妻のハバもくれぐれもよろしくと申しております。

儀礼的なことは別にして、この手紙は二段落でまとめられているように、二つの内容が史的な背景をもってこめられている。一見自明なようではあるが、ブーバーの八十六歳 (二月八日) の誕生日への祝詞としてゲルズンが述べる場合、過去四十年の思いがこめられているのが読みとられるであろう。二区分を念頭におきながら、内容を読みとっていくことにする。

先ず冒頭であるが、ヘブル語の原文を直訳し、独文も英文も Lieber Herr Buber (Dear Mr. Buber) となっている。〈拜啓〉と訳してよく、直訳なら「親愛なるブーバー様」となるであろうが、それでは他人行儀的であって、ゲルズンのブーバーに対する位置が定まらないので、敢て表

ブーバーとゲルゾン

——理想と現実の間——

齋 藤 昭

M. Buber und M. H. Gerson

——Zwischen Ideen und Realitäten——

Akira Saito

一 はじめに

ブーバーとゲルゾン (Menachem Hermann Gerson, 1908～89)¹⁾との関わりについては、一九二〇年から三〇年代にかけてのシオニズム運動の一環に位置するユダヤ青少年運動の流れの中で既に一応の考察をしている²⁾。しかしそこでの研究の重心はブーバーにおかれていたので、その視点からのゲルゾンへの言及となっている。そこで本稿においては、もちろん両者は師弟の関係にあるが、ゲルゾンの発言についてもできる限り目配りして、副題の問題について等価的に考察し、課題に答えるものとする。

とは言っても両者の発言(論文、著書等)や関係研究書等について使用上落差があるのは否定できない。特にゲルゾンの著書その他については若干のものを除いて極端に少ないし、入手は殆んど不可能である。従って彼の発言の主なもの、三巻のブーバー往復書簡集³⁾にみられる彼自身のブーバー宛書簡及びブーバーの彼宛書簡、またレオ・ベック協会か

ら刊行されている年鑑⁴⁾にみられるシオニズムやユダヤ青少年運動に関する諸研究におけるゲルゾンに関する部分、及びそこに記された脚註にみられる彼のオリジナルな文章、更にはハイム・ゴードンによるブーバーとの関係でのインタビューにおける発言等に限られる⁵⁾。またブーバーに関する伝記的研究においてはフリードマンやシェーダーに言及がある⁶⁾で、これらを参考にすることはできる。問題はこのような限定された数少ない文献を通して、先に述べた課題に対して、どのような角度から如何に答えるかでなければならない。

極端に言えば一九三八年まで即ちドイツ在住時代、ブーバーはユダヤ系の枠を越えて予言者的、カリスマ的指導者として名声を博し、識見が高く評価されていたが、イスラエル移住後は、海外の評価は高くとも、国内ではマイナーな地位にとどまったということである。そしてこの評価の落差の中にこそ、ブーバーの一貫した思想と歴史的現実としての時代的・地理的状況とのズレが刻印されるのであり、ゲルゾンのブーバーへの対応の変動、彼自身の立場への評価の変化が現われてくるのである。即ち思想における帰結乃至期待としての〈理想〉とこれと乖離する〈現実〉の中に二人の関係が展開するのであり、これを捉えることにより、両者の史的意義が明らかになるのである。以下、これまで解明した部分を補整しながら、新しい角度からこれを考察していくことにする。

二 ゲルゾンの手紙と史的背景

一九七八年一月三日から六日までイスラエルのベルシエヴァ市にあるベン・グリオン大学で「ブーバー生誕百年記念学会(The Thought of Martin Buber. A Centenary Conference: 1878～1965)」という国際学会が開催され